子どもが思いや意図をもって表現を試みるための指導の工夫

－小学校音楽科における歌唱の活動の実践－

教育学研究科 教育実践創成専攻 教科領域実践開発コース 初等教育分野　西出　真理

1. 研究の目的

本研究は，小学校音楽科の歌唱の活動において，主体的な学びを思いや意図の形成とそれを実現させる試みの過程として捉え，これを促す授業の手立てを計画・実践し，検討することを目的とする。

音楽の授業の中で，その出来栄えや上手い・下手を気にしすぎてしまい，無理だと諦め，出来ない自分を見せるのが恥ずかしいというように表現活動が消極的になってしまう子を見ることは少なくない。特に歌唱の活動には，周りを気にしながらか細い声を出している子や，中には口を開けているようだけど声が聞こえてこないといった子もいる。子どもたちが音楽活動を楽しみ，自身で感じ考えたことを自由に表現し，音楽の面白さや豊かさに気付くことができるような主体的な学びが実現できる授業をどのようにしてつくればいいのかと考えた。

2. 授業づくりの考え方

授業づくりにあたって，まずは子どもが表現活動に消極的になってしまうこと，つまり学習意欲が低下してしまうことについて確認しよう。前川（2023）は音楽科における生徒の学習の意欲喪失要因に関する質問紙調査の分析結果から，「理想との乖離・困難」が生徒のやる気を低下させることを指摘している。その上で「生徒は自身が描いた理想像に到達できない，あるいは到達することが難しいと感じることによって学習意欲が下がり，逆に成功体験をすることが学習意欲の向上につながることを教師は理解しておく必要がある」（p.90）と述べている。しかし，一方で「〈失敗体験，困難〉に関わることが，学習の価値レベルを高めている例もあり，〈成功体験〉の例とは出来事として対照的であるが，共に学習意欲の向上にプラスの影響を与えている場合がある」（p.90）とも述べている。この表現の困難さは意欲を低下させることもあるが向上させることもあるという二つの矛盾から，理想との乖離･困難そのものに意欲を低下させるものとして問題があるわけではなく，乖離のあり方に問題があることを導き出すことができる。

これに関わり，新野・古屋（2024）は，「表現したいことと表現できることに間隙があることが，つまり『分からないこと』や『できないこと』があることが，問いが生まれる条件となる」（p.204）と述べ，むしろそうした理想と乖離が主体的な学びの実現において必要だと述べている。但し，ここでいうその乖離は，子ども自身が表現したいイメージをつくり出すことが前提にされている。

次に，新野・古屋（2024）のいう「表したいことのイメージ」と「問い」の関係を音楽の学習指導要領から探してみると，各学年の目標及び内容の中に「思いや意図をもつこと」という言葉が記されており，「表したいことのイメージ」と「問い」の関係に類似していることが分かる。新野・古屋は「表したいことのイメージ」がふくらみ，どのようにしてそのイメージを表せばいいのかという問いが生まれ，その問いを解決するべく様々な考えが生まれてくるとする。一方，音楽でいう思いや意図をもつことは，思いというのは「表したいことのイメージ」をふくらませることに相当している。思いというのは「表現したいイメージ」をもつものであり，それを実現させるためにはどうしたらよいのかと考えた結果，意図をもつことになる。つまり，その過程は同じであるが取り上げるキーワードや活動のポイントが違うということになる。

歌唱の活動においては，ただ歌うのではなく，表現したい思いや意図をもって歌うことをねらいとし

ている。「どのように歌うかについて思いや意図をもつとは，曲の特徴にふさわしい表現を工夫する過程において，このように歌いたいという考えをもつことである」（p.88）と記されており，表現を工夫する過程において，このように歌いたいという考えをもつことが説明されている。また，中学校学習指導要領にも，例示として「曲に対して『優しい感じの歌だ』というイメージをもち，『優しい感じ』を表すために，声の音色や強弱について様々に歌い試す中で，『優しい感じにするために，柔らかい声で，旋律の上がり下がりの動きに合わせて自然な強弱変化を付けて歌いたい』などのような思いや意図をもつことが考えられる」(p.38)とある。表現したいことのイメージをもち，歌い試す中でどのように歌いたいかという思いや意図をもつことが具体的に説明されている。

以上のことから，歌唱の活動における子どもの学びの過程を図に表すと，図１のようになる。

図の中で〈思い〉から〈意図〉，〈試み〉へと展開していく右回りの過程では，イメージから生まれる「～な感じに表したい」という〈思い〉が，「どうすればできるかな？」という問いかけから「～してみよう」と考える〈意図〉につながる過程となっている。そして，その思いから意図が生まれ，これを実現しようとする〈試み〉と試みる過程の中で〈思い〉がふくらむこともあるという過程そのものが重要になってくる。

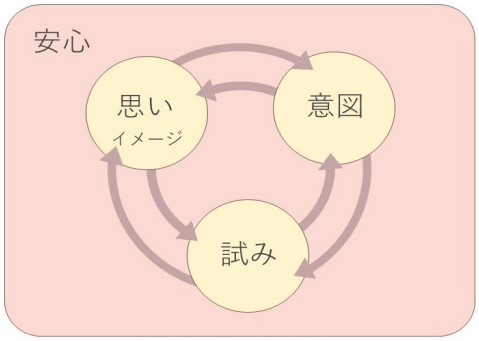

図1　子どもの学びの過程

一方，試みることによって〈意図〉を再確認し，その〈思い〉をふくらませていくという左回りの過程も考えられる。この〈思い〉や〈意図〉，〈試み〉の過程の行き来によって得られる発見や変化から，学びが生まれるということになる。

そして，この活動が成立する大前提が〈安心〉である。子どもたちが〈思い〉や〈意図〉を表したり，それを試したりすることが許される場を作る必要がある。子ども自身が，周りの期待や出来栄えを気にせずに，「～したい」「～してみよう」と思うことを躊躇わず，安心して挑戦できたり音楽に没頭できたりする雰囲気をつくることが必要となる。

⓪	〈安心〉を生み出すための手立て
①	〈思い〉の形成を促すための手立て
②	〈意図〉の形成を促すための手立て

表1　指導の手立て

以上のことを踏まえて，本研究では，授業を図１の子どもの学びの過程に対応するように指導の手立てを表１にあるように三つ立てた。その際，①と②は実際に試みる活動を通して実現し，自分の表現を見つけられるようにしていく。

3．授業実践

（1）授業について

Ⓐ対象：山梨県内の公立小学校　　第６学年

Ⓑ月日：2024 年 9 月 26 日～2024 年 10 月 3 日

Ⓒ題材：思い出のメロディー

（小学校の音楽 6/教育芸術社 pp.32-33）

Ⓓ全体計画：表２

時間	学習内容
第１時	曲想から想像を広げ、表現したい思いを考える。
第２時	想像したことや思いを表現するために意図をもって表現を試みる。
第３時	思いが実現できたか振り返る。

表2　全体計画

（2）題材について

本題材では，曲想と音楽の構造や歌詞の内容と関りについて理解し，感じ取ったこ

とを生かして思いや意図に合った表現を工夫し，どのように歌うかについて追及しながら表現することができるようにしていくことをねらいとしている。この思い出のメロディーという曲は A（a4＋a’4）

＋B（b4＋b’4）＋A’(a”4)の３部形式になっており，優しく語り掛けるようなA（ア）と，のびやかに歌いあがるB（イ）の対比が明確であり，その後に続くA’（ウ）の表現が曲全体を美しく締めくくっている。

子どもたちはこれまでに歌唱の学習を通して，曲想に応じてどのような歌い方で歌うのがふさわしいのか考えたり表現したりする活動を行ってきたと思われる。地声だけではない無理のない響きのある歌い方で歌うことがハーモニーを作り出すためには必要であることや，音程やリズムの違いを理解し正確に歌うことを大切に思っている。また，歌詞の意味を理解し，その思いを表現しようとする子も見られる。自身の自発的な想像や思いを出発点とし，試行錯誤する〈試み〉の過程で〈思い〉や〈意図〉を見つけたり表現したりすることができる題材であると考えた。

（3）授業の手立てと実際

⓪〈安心〉を生み出すための手立て

まずは〈安心〉を生み出すための手立てについて述べる。これは〈思い〉や〈意図〉の形成とその〈試み〉を支えるためのものである。今回の授業で行った主な働きかけは,「肯定的な声かけと表情」である。子どもたちは，自分が感じたり思ったりすることが合っているのか，行っている表現が正しいのかなどと不安に思うことがある。指導者の様子や反応を見て，その是非を確かめていることは容易に想像できるだろう。「いいね。」「大丈夫だよ。」という励ましや笑顔，「うん。」「なるほど。」といった表情や相槌を打つことで，取り組んでいる姿勢を認めていくようにした。また，授業後の振り返りにもコメントを書き込み,子どもたち一人ひとりに肯定的な励ましが行き届くようにした。そうすることにより子どもたちの不安気な表情や歌声が次第にしっかりと自信をもったものに変化していった。

①〈思い〉の形成を促すための手立て

第１時は子どもたちの〈思い〉の形成を促す活動が主な活動となる。曲を聴かせ，感じたことや考えたことを引き出すための発問をしていく。例えば，図２のように「どんな感じがしますか？」と教師が発問し，子どもが「かなしい」という言葉を発したり書いたりしたとする。さらに子どものイメージを広げるために発問をしていくが，その発問は自然に，そして開かれていることを意識して計画している。すると，「かなしい」という表面的な言葉から意味の深い豊かなイメージを表す言葉や文章になっていく。このように子どものイメージを広げるために，様々な子どもの反応を想定し，発問を準備しておくことが必要となる。

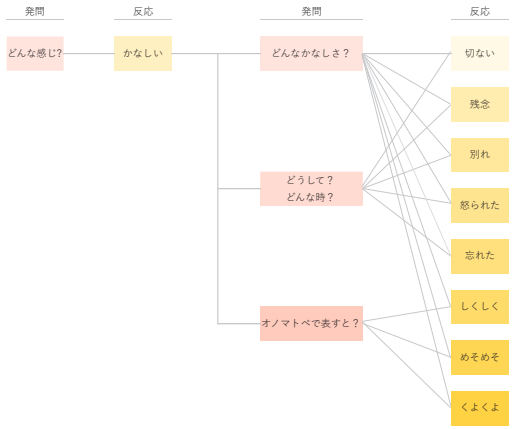

図２　発問からのイメージの広がり例

また，曲のイメージや感じたことを記録したり思考を広げたりするためにワークシートも使う。ワークシートは左側に曲を聴いて思い浮かんだ言葉や文章，絵や図形などを思いのままにかき込めるよう枠や罫線をつけないようにした。

実際にワークシートにかかれたものを確認すると図３の子どもの場合は，「悲しい感じ」がしたけれども，それは「別れ」の時に感じるような，「誰かがどこかに行ってしまうよう」な悲しさで，特に「サビのところ」から感じるという風に聴き取ったことが分かる。これは，「かなしい」という感じが，誰かに怒られ

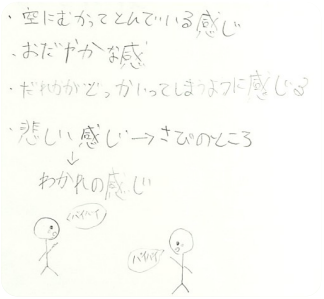

図３　子どもの記述

て感じる悲しさや何かに失敗して感じる悲しさとは違うことがはっきりと分かってくる。更に，この子が感じる別れの悲しさと私たちが感じる別れの悲しさもまた違うはずである。一人ひとりの自身のイメージに近づけるために発問を重ねていくことが大事になってくる。

一人ひとりが図３の子どもと同じようにワークシートに記入しながらイメージを広げた後，みんなで歌う活動を行うためにイメージを共有していかなければならない。それぞれが感じたイメージを黒板に書き出しながら感じ方の違いを確かめたり共通するところ見つけたりし，全員のイメージを共有していった。そしてそのイメージを「〈思い〉のキーワード」としてまとめ，第２時の活動につなげていった。そのキーワードはワークシートの右上に書き込むようにしておき，いつでもその〈思い〉を思い出せるようにした。

図4　第1時板書

図４は，今回の授業で子どもたちが感じたイメージの言葉や絵を黒板にかき出したものである。同じ「空を飛んでいる」という言葉でも力強く羽ばたくようなイメージの子どももいれば，「ふわふわ」「すいすい」と飛んでいる様子を伝える子どももいたが，これらは旋律の動きからそのイメージをもつ子が多かった。また，曲の雰囲気から全体的に「優しく」「切ない」「かなしい」感じをイメージしたり，歌詞の言葉から「別れ」のイメージをもったりする子が多かった。〈思い〉のキーワードとしては，「空をとびながらやさしくわかれをつたえたい」というものができた。

②〈意図〉の形成を促すための手立て

第２時は想像したことや思いを表現するために歌い方を工夫することが主な活動となる。つまり〈思い〉を表現するために「こういう風に歌いたい」という〈意図〉を形成していく活動である。第１時でつくった「〈思い〉のキーワード」をもとに発問していき，それを表現するような歌い方を見つけていくように活動を仕組んでいく。

今回の授業では，歌を歌ってみた後，どんな歌い方をすると〈思い〉が伝わるかを考えてワークシートに書く時間をとった。その際，全体や個別に「どんな風に歌えばいいかな。」「どんな風に歌えば〈思い〉が伝わるかな。」等と声をかけていき，ワークシートに記入させていった。また「どの辺りをそうしたいかな。」等と表現する箇所も確認していくようにした。

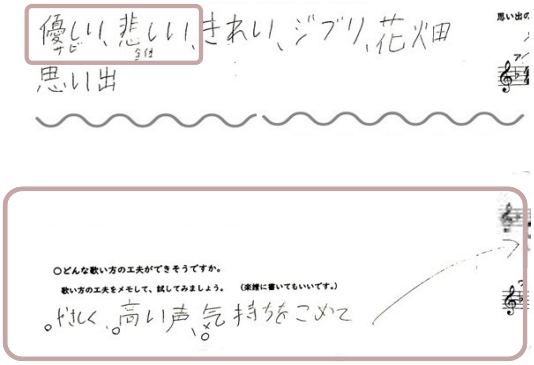

図5〈思い〉を〈意図〉に結び付けていく子どもの記述

図５の子どもは，第１時で「優しい」「悲しい」という言葉で曲のイメージを記している。それを表現するために曲のどの部分からその感じがしたかを考え，言葉の下に「サビ」「全体」と記していた。また「どんな歌い方の工夫ができそうですか。」という設問の所にも第１時でイメージしたことを表現の〈意図〉に結び付けるための考えが記されるようにしてあるが，図５の子どもは具体的には「やさしく，高い声，気持ちをこめて」と記していた。机間巡視の際，どの辺りをそう歌いたいのかを問いかけると，ワークシートにある譜面を指差して教えてくれたので，それが分かるように矢印をかいておくといいと助言をした。

このような活動の後に，考えた表現を実際に歌って試していくことにした。表現を歌いながら試していく手立てとしては，次の二つの方法で行った。

方法１:〈思い〉を表すための歌い方を考えて確かめる
方法２:〈思い〉を込めて歌い，その歌い方を確かめる

方法１では〈思い〉を表すための歌い方を考えて確かめる方法である。これはつまり図１でいうところの右回りの過程にあたる活動である。

授業では，ワークシートに書きながら考えた歌い方の工夫として多く出てきた「やわらかく歌う」という歌い方をみんなで試していった。子どもたちはやわらかく歌っているつもりなのだが，いまひとつしっくりこないという感じになった。どうすればいいかを表３にあるようなやり取りの中で，「かたいところを入れれば，やわらかくなるかもしれない。」などと，「やわらかい」と反対の「かたい」歌い方を試してみるという授業の流れになった。その後，曲のＡ（ア）の部分をどうするか歌い，試しながら思いのイメージに合うかを確かめていった。歌い終わった後には「どうだった？」と教師が確認していくようにする。そうした活動を通して，やわらかいイメージを表現する歌い方は，かたいイメージの歌い方との対比で，「できるだけ音と音をつなげるような歌い方」だということを歌いながら歌い方を見つけていった。

T	上どうする？上もかたくする？
C1	かたい。
T	かたくする？これ（〈思い〉のキーワード指す）伝わる？
C1	いや～かたいところ入れればやわらかくなるかもしれない。
T	ああ，じゃあここ（アー段目指す）かたくして，ここ（アニ段目指す）やわらかくして，これ（〈思い〉のキーワード）のがやれるか。やってみようか。じゃいくよ。前奏からいきます。
C	歌～（そっよっぐっかっぜっにっさそっわっれっ　いっつっのっまっにっかっ　ざっわっめっくっなっみっ　やわ～らかな～あいの～う～た～　なつかしいあのメロディ～）
T	どうだった？

表３　歌い方を考えて〈試みて〉確かめる右回りの過程のやり取り

方法２として〈思い〉を込めて歌い，その歌い方を確かめる方法であるが，これはつまり図１でいうところの左回りの過程にあたる活動である。〈思い〉を込めて歌ってみた後に「どんな歌い方になっていた？」「なにか工夫した人いる？」と問いかけ，自分たちがどう歌っていたのかを見つけていくように促していくようにした。

授業では，曲のＡ’（ウ）の最後「きみにつたえて」の部分の表現を考えるため行った。子どもたちは〈思い〉を込めながら歌ったけれども，どう工夫したのかを自身で気づくことができなかった。そこで，もう一度〈思い〉を込めて歌ってもらい，今度は教師が子どもたちの歌っている様子からその工夫を見つけるという流れになった。子どもたちの歌う様子を観察した結果，「『きみにつたえて』の前に息継ぎをして言葉の入りを丁寧にしていた」という様子を見とることができ，表４のようなやり取りでその様子を伝えた。子どもたちが気づかず自然に行っていた表現の工夫をこのようにして意識化させていった。

C	歌～（わす～れずにわすれ～ずに　きみに～つた～え～て～）
T	ストップ！
C	歌～（しろ～いくも～に…）
T	今，何か感じた？
C	…
T	わす～れずに～わすれ～ず～にって，なんかね，思いを込めるとこれを吸っていた。
C1	V（ブイ）をすってた。
T	Vをすってた！Vってなんだ？
C1	V（ブイ）
C2	ブレス
C3	息継ぎ
T	うん。これ，息継ぎをして，なんか準備をしていた。ちょっとやってみようか

表４〈思い〉込めて歌い，歌い方を確かめる左回りの過程のやり取り

こうした〈思い〉や〈意図〉を歌いながら試していくことを繰り返していきながら，自分たちがイメージする〈思い〉に合う表現の仕方を決めていった。

最終的には，曲の全体的なイメージとして「空をとびながら，やさしく」は，「やわらかく・音をつなげるように」歌う。曲のＢ（イ）の部分のところから「空をとび立つような感じ」にするために「強く元気よく」歌い，「ときめきを」の部分が「一番大きくなるように」歌う。曲のＡ’（ウ）の部分では最後の別れのイメージを出すために「だんだん弱く」歌う。最後の「きみにつたえて」のところは「やさしく別れを伝えるような感じ」にするために「弱く」歌うけれども，より「つたえたい」〈思い〉を込めるために「息をすって言葉の入りが丁寧になるよう」に準備をするという歌い方にまとまった。このことは掲示した楽譜に記して共有した。図６はこれを再現したものである。

第３時には仕上げとしてこの歌い方で歌い，〈思い〉が表現できているかを振り返る学習活動を行い，まとめていった。

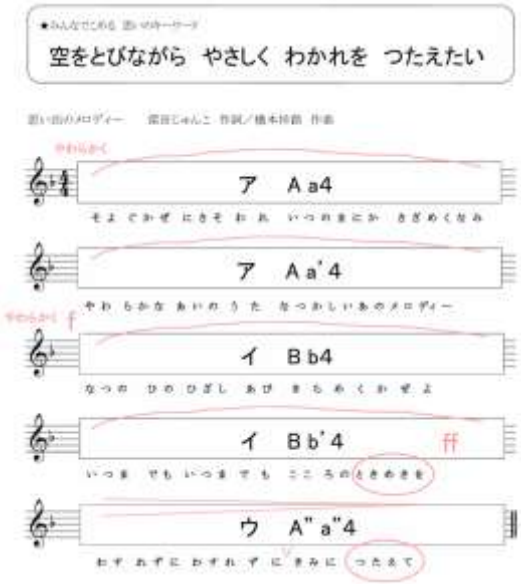

図6　共有した歌い方の掲示物（再現）

4. 考察

ここまで，子どもの学びの過程に対応した三つの指導の手立てを授業の実際とともに書いてきた。ここからはそれぞれの指導の手立てについて検証していく。

⓪〈安心〉を生み出すための手立て

まずは〈安心〉を生み出すための手立てについて考察する。

子どもたちが自分の〈思い〉や〈意図〉やその〈試み〉を〈安心〉して表現できるようにするために手立てとして「肯定的な声かけと表情」を授業の中で大事にしてきた。各授業後のふりかえりの記述を見ると，授業を通して〈思い〉や〈意図〉，〈試み〉の過程が分かる表記がワークシートに見られた。これは，この授業が安心して音楽を感じたり考えたり試したりできる場所になっていたことを表している。

表５は，ある子どものワークシート全３時間分のふりかえりであるが，第１時のところに「曲のかんじが人それぞれで…」と書かれている。この部分から，この子は感じたことに正解も不正解もなく，感じたことを自由に言い合うことができるということに気付いたことが確認できる。第３時の記述からも，この授業の中で感じ・考え，試みることを繰り替えして行ってきたから自信がもてるようになったともいえるのではないだろうか。

第１時	曲のかんじが人それぞれで　みんなの考えが聞けてよかった。
第２時	いろんな歌い方をくふうしてみて　やわらかくうたうと自然にこえが　みんなくふうしていて　すごいと思った。
第３時	前まで自信をもって歌えなかったけど今では自信をもって歌えるようになった。１番最初にくらべて　やわらかく、やさしく、うたえたし　わかれをしっかり伝えられた。〇〇ちゃんの声がやさしく、つよく、曲に合った歌で参こうになった。

表5　子どもの〈安心〉が確認できる記述（原文ママ）

①〈思い〉の形成を促す手立て

次に〈思い〉の形成を促す手立ての考察をしていく。〈思い〉の形成を促すために，曲を聴いた後「どんな感じがするか」を主発問にし，さらにその思いやイメージを広げるための発問をしていく働きかけを行った。表 6 は〈思い〉のイメージがふくらんだ様子が分かる子どもの言葉を抜粋したものである。子どもたちのイメージを広げるための発問を行うことで，より〈思い〉を表す具体的な言葉や文章になったり，曲のどの部分から感じるのかを見つけることができたりしたことを，ワークシートの記述から確認することができた。これは発問によって〈思い〉のイメージの広がりが促されたと捉えることができる。

・どんな感じかが分かった。
・夜というのが出たけど、たしかになと思った。
・ジブリは思いつかなかった。
・しぜんと身体が動いた。
・曲の感じがしっかり考えられた。歌詞があるのとないので感じ方がちがった。
・曲の感じが人それぞれで、みんなの考えが聞けてよかった。
・みんなで意見を出せてよかった。いろんな意見が出ておもしろかった。
・思いのキーワードがつくれてよかった。こういうように歌いたい。
・空をとんでいる絵を思いつたのがすごいと思った。

表6〈思い〉の形成に関わる，ふりかえりの抜粋（原文ママ）

さらに全員でその〈思い〉を共有することは，自分の〈思い〉における新たな気づきや深まりにつながったこともワークシートの記述から確かめることができる。この〈思い〉をもとに共有した「〈思い〉のキーワード」をつくることによって，第２時で行う〈意図〉の形成が実現しやすいものとなったと考える。

②〈意図〉の形成を促す手立て

〈意図〉の形成を促す手立ての考察をしていく。意図の形成を促すために〈思い〉をもとにして「どんな風に歌えばいいか」という発問をし，「こんな風に歌ってみたい」という表現の仕方を考えた。そして，それを歌い試しながら，表したい〈思い〉に合っているかを確かめる方法 1「〈思い〉を表すための歌い方を考えて確かめる方法」と〈思い〉を込めながら歌い，どのように歌っていたかを見つけていく方法２「〈思い〉を込めて歌い，その歌い方を確かめる方法」の二つの方法を実践した。

・まえの時間よりも　その歌にあった声がだせてすごくうまくなったような気がした。
・歌い方を工夫してみたら、同じ言葉だけど色々な感情が伝わってくるからおもしろかった。

表7〈意図〉の形成に関わるふりかえりの抜粋（原文ママ）

方法 1 の〈思い〉を表すための歌い方を考えて確かめる方法であるが，歌い方を考える時に，〈思い〉を伝えるためにどんな歌い方にするとよさそうか，またどの辺りをそうしたいかを発問で引き出していくことで，〈意図〉が明確になり，それが歌い試すための材料となった。表 7 は〈意図〉に関わることをふりかえりに書いていた子のものを抜粋しているが，より〈思い〉のイメージに近い歌い方を歌いながら試していくことで見つけることができたことが確認できた。また，表 8 のように子どもたちの歌い終わりの言葉や反応からも自分自身で納得した歌い方ができたことを感じることができた。

C	歌～（なつの～ひの～…きみに～つた～え～て～）
T	どう？
C1	いい感じ。
C2	フゥ～
C3	いい感じ。
T	雰囲気は　いい感じになった？
C4	いい…
T	うんうん。いいね。

表8　歌い終わりの子どもの言葉や反応

方法 2 の〈思い〉を込めて歌い，その歌い方を確かめる方法でも，自分たちはなんとなくそうしている，そうなっている歌い方を発見し，それを〈意図〉として表現することで，さらに〈思い〉を広げることができたこともワークシートの記述からみることができた。表 9 は〈意図〉をもって試してみることでまた〈思い〉がふくらんだことが分かる子どものふりかえりの抜粋である。「たくさんうたえて楽しかった。

・たくさんうたえて楽しかった。ぽかぽかする。なんにも考えられないくらい楽しくうたえた。
・歌っているときに「フワッ」てした。

表9〈思い〉がふくらんだことが分かる、ふりかえりの抜粋（原文ママ）

ぽかぽかする。なんにも考えられないくらい楽しくうたえた。」「歌っているときに『フワッ』てした」と記されていた。この子どもたちの言葉から，〈意図〉をもって試してみることでさらに自身の〈思い〉がふくらみ，歌と自分がひとつになり，音楽を表現する喜びや心地よさを感じることができたとみることができる。

5. まとめ

この研究では，音楽科の歌唱の活動に焦点をあて，主体的な学びを〈思い〉や〈意図〉の形成と，それを実現させる〈試み〉の過程として捉えた。これを子どもの学びの過程として図に表し，それに対応するような指導の手立てを考え，実際の授業を試みた。

まず授業実践研究から，開かれた安心した雰囲気の中で，子ども自身の〈思い〉の表出や〈意図〉を導き出すための自由な〈試み〉が実現できたことを確認することができた。

次に〈思い〉の広がりを促す発問やワークシートの活用は，その活動の様子やワークシートの記述から有効性があるということを確かめることができた。

そして〈意図〉を促す手立てとして，発問やワークシートの活用とともに歌い試す活動から，自分たちの表現を見つけることの楽しさや〈思い〉を実現したり実現しようとしたりする過程の中で，さらに自分のイメージをふくらませることができることを，授業から確認することができた。

以上のことから，この図に基づいた授業の手立ては概ね有効性があるものとして考えることができる。もちろん，今回の成果が全ての子どもたちに当てはまったものではないことや他の働きかけによって生み出された可能性があることは否めない。事実，〈安心〉を生み出すための手立てとして「肯定的な励ましと声かけ」だけで安心した教室の雰囲気をつくったわけではない。場合によっては，それをつくり出すことが最も優先されるべきことかもしれない。また，発問のタイミングや表現の見とり方等，教師自身が子どもの状態や様子を感じとり，それに合わせて柔軟に言葉を選んだり活動を提案したりする必要があり，それをどのようなタイミングや場面で行えばいいのかというところまで明らかにするのは難しく，教師の直観に委ねなければならないところがあることは課題として残った。

しかしこの考え方は，表現を子ども自身で見つけるための指導方法や授業計画を考える上での手がかりとして考えやすく使いやすいものであり，音楽の他領域や他教科でも活用することができる可能性を感じた。

6. 参考・引用文献

・前川楓瀬「音楽教育における学習意欲と教師の働きかけ－期待×創価理論に着目して－『音楽文化教育学研究紀要』№35，広島大学大学院人間社会科学研究音楽文化教育学領域，2023，pp.85-94
・新野貴則・古屋美那美「主体的な学びの実現を目指す美術科の指導方法－生徒の問いの形成を促す発問構成」『美術科教育学会誌「美術教育学」』第 45 号，2024，pp.201-218
・文部科学省『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　音楽編』日本文教出版，2018
・文部科学省『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　音楽編』日本文教出版，2018
・小原光一ほか 20 名『小学校の音楽 6』教育芸術社，2024
・小原光一ほか 17 名『小学校の音楽 6　教師用指導書研究編』教育芸術社，2020